



Tsu-mu-gu

松原高校卒業生からのメッセージ  
第2集



## つむぐ〔紡ぐ〕

Tsu - mu - gu

つむぐとは、綿まゆや繭まゆから何本もの細い糸を拾い上げ、よ縊り合わせて一本の木綿糸もめんいとや生糸きいとにしてゆくことです。

例えば、自分の気持ちを大切に、ひとつひとつの言葉を拾い上げて話すことを「言葉をつむぐ」と言います。


松原高校を卒業した私たちは、今、一本の糸をつむいでいます。

その時、人の気持ちや痛みを拾い上げること、世界に思いをはせること、そして、自分から動くことを忘れずにいます。

私たちは、同じ場所でその大切さを学びました。

その場所を巣立った私たちからの言葉を届けます。





自分たちにしかできない現場がある。  
チームワークを裏打ちするのは、使命感。

# 山内 涼太 Ryota YAMAUCHI

消防士 松原市消防本部

36期生（総合学科14期生）

# 01

バスケットボール部キャプテン。部落問題研究部。  
大原簿記法律専門学校を経て、松原市消防本部へ。  
平成30年7月豪雨では緊急消防援助隊として現地での任務に従事した。

人の役に立ちたい—中学2年生の職業体験では、訓練や火災現場の経験談が、とても格好良く感じられた。しかし、実際の現場は訓練とは全く違う。屋内の火災現場に立ちこめる煙。10cmの見通しすらきかないなか、初めての場所を進んでいく。土砂災害の現場では、「絶対見つけたる！」一心で、手作業を続けることもあった。

過酷な条件下のチームワークを支えるのは、高校のバスケットボール部で培った使命感。そして、仲間。一番大切な話を、一番にしてくれた。その仲間と、部活をやり遂げたことが、今に生きている。







困っている人の声を、想いを、  
カタチにしていきたい。  
そのために、手段をもつ。

## 西本 由依 Yui NISHIMOTO

東海旅客鉄道株式会社

35期生（総合学科13期生）

女子サッカー部キャプテン。体育祭では学校全体のリーダーを務めた。また、知的障がい生徒自立支援コースの生徒と、「仲間の会」でともに学び、ともに育った。高校卒業後に就職し、13年目になる。新幹線の車掌、運転士を経て、現在は総務にてデスクワークをしている。

入社1年目で前例のない駅精算業務につき、内勤業務も経験した。憧れの業務を担うため、ひたむきに努力してきた。前例がなくても、やり抜く想いを持って、手段を模索しながらゴールに向かって進む、賛同してくれる仲間とともに。努力し最後までやりきる姿勢を身に着け、仲間との信頼関係を築くことができたのは、自分の意思で、責任で実行できる環境が松原高校にあったから。「仲間の会」も私を成長させてくれたひとつのフィールド。様々な人が寄り添いながら互いを認め合い、時には助け合った。多様な価値観を持った人との関係性を築けた経験があったから、多くの人と関わる仕事で、今も、これからも活躍していく。



02

# 由浅 悠

Haruka YUASA

03

社会福祉士 大阪市社会福祉協議会 大阪市ボランティア・市民活動センター  
40期生（総合学科18期生）

関西大学 人間健康学部 人間健康学科卒業

大阪市社会福祉協議会に入職後、西成区の地域支援担当を経て現職。

高校時代は、ストリートダンス部キャプテン、東北震災復興ボランティア、  
るるくで活躍。

「子ども」、「高齢者」などの分野を、行き来して関わるのが地域福祉。

大学3回生の時に、和歌山県有田市で福祉教育のフィールドワークを行った。

地域の高齢者宅を訪問した小学生たちは、「次の訪問でどんなことをしたら  
喜んでくれるかな？」と考え始める。関わる大人もいきいきしていた。

社会人1年目は、緊急事態宣言下。高齢者宅への配達弁当に、子どもたちか  
らの手紙と折り紙をつける工夫で、高齢者と子ども、地域と学校とが繋がっ  
た。地域のあたたかさを信じて引き出す取り組みのルーツは、松高。

いっぱい愛情をもらった私。いろいろな人の話をきいていきたい。



「いつ来てもいいよ。」という言葉に、  
関わりたい気持ちがふくらむ。  
みんなが自分らしく生活できる地域を、  
一緒に作っていきたい。





# 川石 大遥

Taiyo KAWAISHI

パーソナルトレーナー Dreinno代表

35期生（総合学科13期生）

# 04

小中高を通してサッカー部のキャプテンを務める。

FC大阪、ルネス紅葉スポーツ柔整専門学校、ザスパ草津練習生、フィットネス会社社員を経てワンオンワン・トレーニングジム Dreinnoを設立。

高校卒業後、結果がすべての世界に身を置いた。繰り返される怪我やパンデミック下、もがいても結果が出せない状況に直面するたびに、「じゃあどうするのか?」と問い続けた。松原高校では自分の個性が否定されない環境で、相手から学ぶスタンスを身につけた。個性は消さずに伸ばすもの。

今、Dreinno でもその人の身体をカタチ作ってきたバックグラウンドに敬意を払う。ひとりひとりの心と身体の健康、そして幸せに寄り添える、本物であり続けたい。



なぜ? どうしたら?  
問い続けたら「自分」が戻ってきた。



寺社仏閣のように、木が経年変化した姿には、  
使ってきた人々の「色」が重なる。  
ものづくりで、人と関わりたい。

## 孫 和哉 Kazuya SHON

家具職人 WOL代表

36期生（総合学科14期生）

京都精華大学 芸術学部 造形学科 洋画コース卒業。


大学在学時から、福井県の河和田アートキャンプに参加。卒業後、同県伝統工芸職人塾で越前箆笥の制作に学ぶ。現在は家具の作り手としてWOL代表を務める。高校時代は、美術部、写真部をはじめ、スリランカ・スタディツアーや東日本大震災ボランティアなどあらゆる活動に参加。

「良いもの」の価値は、作り手がどういうものづくりをしてきたかに在って、作る一歩は、ものを使う人につながるすべてのものを見つめるところから始まる。だから、作り手にとっても、自分を殻から出してさらけ出す作業になる。その人を想ったデザインで、後の始末まで心地よい、ものづくりをしよう。ものが大切にされている空間と、大切な仲間がそこにいる喜び。おじいちゃんになったときに、自分が作ったものを見たい。



# 05





ネパールやカンボジアで、被災地で、  
出会ってきた笑顔、光、涙。  
問題だらけの「明日」を生きる人たちの、  
きっかけを作り続けたい。

## 武島 美優 Miyu TAKESHIMA

美容師 オーガニックヘアサロン bo:rl  
39期生（総合学科17期生）

# 06

国際交流部、アジア・スタディツアー（ネパール）、チャンゴーズ（朝鮮文化研究部）、ピアカウンセラー。高津理容美容専門学校在学時に、美容ボランティアとしてカンボジアの孤児院でのヘア・ショーに参加。現在もbo:rlに勤めながら児童養護施設や被災地での美容ボランティアを続けている。

行動力の塊だった松高時代。「行きたい」、「見たい」という理由だけで、ネパールまで飛んだ。そこでは、環境、教育や貧困の問題が山積みになっていた。それと同時に出会った、人々の優しさ。現地の村で、貴重な牛を捌いた食事でもてなされた時、命をいただいて生かされている、と実感した。美容師として人々の髪に触れていると、その人の大切な話にも触れることがある。家族への想い、身体のこと。自分にできることは限られているかもしれない。それでも、たくさんの人に「きっかけ」を作り続けていきたい。



# 寺本 あかね Akane TERAMOTO

社会福祉法人 大阪手をつなぐ育成会 相談支援部門  
31期生（総合学科9期生）

07

大阪大谷大学 人間社会学部 大学進学後も松原高校の学習サポーターを務める。大学では教育福祉学部にも関わり、支援学校のインターンシップや学習支援の経験から障がい児教育のおもしろさに出会う。大学卒業後、大阪教育大学特別支援教育専攻科へ。そこで障がい福祉サービスを知り、「コレだ！」と感じ、入職。法人では就労移行支援、グループホームのスタッフを経て相談支援部門に就く。

学習支援の経験を通して、「できる、わかるって、楽しい！」と知ったのは、勉強が大の苦手だった自分自身。お互いにできることを増やすことが楽しくて、ほめることばかりになった。100点（完璧）をめざさなくてもいい、と教えてもらった。入職したての頃、「自分が関わることでその人によって変わってほしい!」、「その人のことは全部知ってほしい!」と思っていた。でもそれは大きな間違い。その人の人生は、その人のものだった。どんな道に進むことも、失敗することも、その人の権利。「そう来るか!」な価値観を、あたりまえに大切にしていける相談員でありたい。



「社会と福祉の懸け橋になりたい」と  
大学入試で言ったことが、ホントになった。  
どう生きるかを、一緒に歩んできた。

# 綱文香

Ayaka TSUNA

08

看護師 大阪市立総合医療センター

35期生（総合学科13期生）

HIV・AIDS啓発の自主活動「るるく」、女子サッカー部で活躍。

堺看護専門学校卒。感染症内科を経て消化器外科へ。

高校時代に、るるくの活動でさまざまな立場の人たちと対話を重ねた。ある公演で、HIVの母子感染をめぐる質問にうまく答えられなかったとき、ひとりの医師が説明を助けてくれた。知識があることのチカラを教えてもらったあの日が、キラキラしている。看護の現場では、チームが出せる最大の力が届かない無念さに直面した。病気の予防や治療に対して、ポジティブに向かうことが難しくなる人もいる、ということも知った。そんな時、いつも私のどこかにある言葉、「知る、考える、動く」。

今、苦しんでいる人にやっぱり関わりたい。



その人が、本当に抱えていることがある。  
それを見つめるところからしか始まらない。  
だから私は現場に来たのだと思う。





「よかったね」、「たのしかったね。」、  
「いやなきもちがしたんやね。」を、  
「だいじな〇〇ちゃん。」に伝える。  
子どもがりのままのびのびできる、  
あったかい居場所を。



## 笹崎 志帆 Shiho SASAZAKI

# 09

保育士 泉大津市立かみじょう認定こども園  
42期生（総合学科20期生）

高校では、保育を中心に学んだ。文化祭の自主企画「えほんのひろば」は、地域の子ども、保護者に大好評。朝鮮文化研究部。  
大阪芸術大学短期大学部 保育学科卒業。

高校では、人権の集いや課題研究を通して、隣の人の気持ちを考えたり、正解のない課題と向き合ったりしながら、自分の芯をつかんだ。  
大学では保育の理念や心理学などの学びを深め、子どもたち一人一人が安心できる保育をめざし、保育の引き出しをたくさん作った。  
現場では、想像していたよりもずっと、一握りのことしかできないけれど、親も子どもも笑顔にしたい。保育の奥深さやおもしろさを感じながら、日々子どもたちと過ごしている。





人の立場に立ち、  
自分の良心に従って生きていく。  
人を大切にする土台は、松高で築いた。

## 加納 翔 Sho KANO

NK Marine United・COO  
32期生（総合学科10期生）

# 10

京都産業大学 外国語学部 国際関係学科を卒業後、国際物流に携わる。バリ島に自生するカカオを用いたチョコレート開発や、物流事業の経験を生かしたオンラインショップの経営等を経て、現在は、国際貨物船のクルーの出航、帰港の手続きや、医療に適切につなぐための事業を展開している。

世界中からやってくる船員から、ニュースとは全く違う現状を知る。下船しても、故郷の戦火によって帰りの飛行機に乗れない人もいる。どの人も、無事に出港して、無事に家族の元に帰ってほしい。

高校2年で参加した、タイ・スタディツアーでは、少数民族の子どもが、山の中にペットボトルを「土に還るから、いいねん。」と信じて捨てていた。そこで自分には何ができるのか考えた。貿易を学んだのは、人々の豊かな暮らしに携わりたかったから。豊かであるとは、一部の人のためのゴールではなくて、それぞれが「将来に希望を持つ時間を持っている」ということだと思う。







Tsu-mu-gu







タテ糸とヨコ糸を織りあげると、一枚の布が出来上がります。

その大きなあたたかい布で  
誰かを優しく包むことができれば素敵だと思います。

あなたも「つむぐ」仲間になりませんか。



10年前に40周年を記念してTsu-mu-guが編まれてから、タテ糸とヨコ糸が織りなされていくイメージは、松原高校の学びを表すものとして大切に引き継がれてきました。本冊子のデザイン、編集を担当してくれた44期生の坂本梓さんも、自身の卒業式の背景にはたっぷりの糸を使っています。その背景から紡がれた糸が、この第2集をあたたく包んでいます。自分の感性をさらに磨き、本質は何かを問うことをやめない10人の卒業生。その言葉や、まなざしが、優しく深く、胸に迫ります。松高に集うみなさんと、この感激を分かち合いたいと思います。

Tsu-mu-gu 制作係





Tsu-mu-gu 第2集

2023.11.2

大阪府立松原高等学校同窓会

Tsu-mu-gu 制作係







Tsu-mu-gu